

井上直樹著

帝國日本と〈滿鮮史〉

——大陸政策と朝鮮・滿州認識——

古畑 徹

—

本書の著者・井上直樹氏は、新進氣鋭の高句麗史研究者である。文獻史學の堅實な方法に基づいて高句麗をめぐる東北アジアの國際關係史を中心に着實に成果を積み上げる一方、早くより高句麗史の歴史的枠組みがどうあるべきかを考え、そのために近代日本や中國・韓國における高句麗認識の問題についても次々と論稿を發表してこられた。その研究活動が塙書房の目に留まり、井上氏自身が「ひそかな課題」(二四四頁)と述べる滿鮮史の批判的検討についての著書執筆が依頼され、塙選書の一冊として書き下ろされたのが本書である。

評者が専門とする渤海史と高句麗史の状況とは酷似しており、評者の問題意識と井上氏のそれとの間にはシンクロするところがある。本書冒頭に登場する「韓中歴史戦争」發生直後の二〇〇四年六月にソウルで開かれた高句麗研究會にともに招聘されて報告を行ったし、それ後も井上氏から高句麗認識問題を扱う論稿が送

られてくるたびに目を通してきた。二〇一二年六月の洛北史學會大會に招かれた際には、京都府立大の井上氏の研究室にお邪魔し、その際に本書執筆のことやその苦勞も伺った。それだけに本書の刊行には他人事ではない喜びもあったし、選書という手輕さもあって、早速今年度(二〇一三年度)前期の特殊講義では本書をテキストに指定し、それを學生と共に讀み解く授業を行うことにした。その後、本書評の依頼を受けたが、特殊講義の方は豫定通りに進めさせてもらった。したがって、本書評には特殊講義での學生たちとの意見交換が反映されており、その意見を採用した部分もある。ただし、それらを採用したのは評者であるから、本文章のすべての責任は評者に歸すものであることを、まずは明記しておきたい。

以下、通例に従って章を追っての内容紹介と簡単なコメントを附したうえで、全體的な評價へと論を進めるが、本書は本誌書評が通常採り上げる研究書ではなく、書下ろしの選書である。そのため、各章の紹介をすることに迷いもあったが、章ごとに新知見が存在し、かつそれを踏まえてこそ高句麗史の歴史的枠組みの検討という本書のメインテーマに接近しようと思われたので、通例どおりの形を採ることにした。その點もご了解いただきたい。

二

まずは本書の構成を目次の提示によって概観したい。目次を章だけにとすると内容がわかりにくいので、節も含めて提示する。

I 高句麗史歸屬問題と滿鮮史

一 高句麗史歸屬をめぐる對立

- 二 中國・韓國の高句麗史認識
 - 三 戦前日本の満鮮史研究批判と問題點
 - II 近代日本の朝鮮・満州認識と日露戦争
 - 一 草創期の朝鮮史研究
 - 二 日露戦争と白鳥庫吉の満鮮觀
 - 三 日露戦争後の稻葉君山の満鮮認識
 - III 日露戦争後の朝鮮・満州支配と満鮮史研究
 - 一 満州軍參謀と稻葉君山の「満鮮不可分論」
 - 二 白鳥庫吉・後藤新平と満鐵歴史調査部
 - 三 満鐵歴史調査部と満鮮史研究
 - IV 日本の大陸政策と満鮮史
 - 一 稻葉君山の「満鮮不可分論」と朝鮮人の満州移民
 - 二 檀君神話と稻葉君山の「満鮮不可分論」
 - V 満州國と満鮮史
 - 一 満州國と満州史歸屬をめぐる日中の論争
 - 二 「鮮滿一如」と満鮮史
 - VI 満鮮史と高句麗史研究
 - 一 満鮮史のなかの高句麗史
 - 二 高句麗史研究の視覺
- 本書には序章・終章の類がないが、IとVIがその役割を果たしており、中間のII～VがIで示された問題意識に基づき事實關係を時間順に明らかにする本論、という構成になっている。では、各章ごとに内容を紹介していく。
- 序章に當たるIは、第一節が前置き、第二節が論點整理、第三節が研究史整理と問題設定という構成になっている。前置きでは、

二〇〇三年に韓國マスコミが行った「中國による高句麗史強奪」の報道（中國社會科學院・東北三省合同の歴史研究プロジェクト「東北工程」は、韓國史たるべき高句麗史を中國史に編入しよう¹⁾と企んでいるものとする報道）に端を発する「韓中歴史戦争」を、當時ソウル大に留學していた筆者の経験を含めて叙述したうえで、同様の経験を中國留學中にもしたことに言及し、高句麗史の歴史的²⁾位置づけの困難性が浮き彫りにされるとともに、筆者の問題意識の原點も明示される。ついで、本書の前提として高句麗史を概観したうえで、第二節では中國・韓國・北朝鮮における高句麗史研究とその歸屬認識が時間軸に沿って整理され、歸屬認識の對立は二〇〇三年に突然生じたものではなく、中國の研究者には韓國・北朝鮮から論争を仕掛けられたとの認識があり、「東北工程」はその延長線上に登場したことなどを明らかにする。さらに對立の克服を目指す主張として、現在の國家・國境を越えて高句麗史を理解しようとする金翰奎氏の「遼東史」を紹介するが、戦前日本の満州史³⁾との類似性も指摘し、それを受けて第三節では戦前日本の満鮮史に對する戦後の批判的研究の研究史が整理・考察される。そして殘された課題として、(1)満鮮史の前提たる「満鮮不可分論」が當初研究者によってどのように認識され考究され始めたかという満鮮史研究の出發點の議論がほとんどないこと、(2)満鮮史がその時々⁴⁾のいかなる時代的要請によってどのような觀點から希求され、どのように研究されたかが十分に明らかにされていないこと、が指摘され、本書の追究課題が、①民族や國家を越えて満州と朝鮮半島を一つの歴史地理的空間とする満鮮史がいかなる理由で、近代日本の東洋史において登場し研究されたかを明らかに

にする、②満鮮史の枠組みがいかなる史實にもついで検討・構築されたのかを明らかにする、であることが提示される。特に②は近代日本における高句麗史の位置づけの再検証にほかならず、現今の高句麗史歸屬問題とも密接な關聯を有することも明記されている。

「韓中歴史戦争」については日本でも一部に高い関心があり、ネットなどで採り上げられているが、その情報には誤解が多く、その誤解がしばしば研究者の認識にも影響を與えている。本書ではそこに至る経緯とその後の動向が丁寧かつコンパクトに記され、誤解を解くのに最適な内容となっている。一方、満鮮史に關する叙述の方は、研究史自體は正しく把握されていると思われるが、表現に不安定な部分が存在し、讀者に混亂を與えやすいところがある。この問題は本書全般にわたっており、あとでまとめて詳述する。

本論冒頭となるⅡは、明治中期から日露戦争直後までを扱い、白鳥庫吉と稻葉君山の日露戦争前後の朝鮮・滿州認識を中心に追究課題①を検討する。まず戦前の満鮮史の性格を論じる前提として近代日本における東洋史學の形成過程と朝鮮史研究の始まりが概観され、そのなかで近代歴史學の手法を身に附けて朝鮮史研究に着手した最初の人物として白鳥庫吉が登場し、日清戦争期の朝鮮への關心の高まりのなかで彼が朝鮮史研究の論稿を公表する事實に注目する。ついでその後の白鳥へと論を轉じ、彼が日露戦争期に積極的に時局に對して發言し東洋史研究振興の必要性を首唱したこと、日露戦争直後には日本の朝鮮統治における遼東半島支配の必要性を高句麗の例などを踏まえて唱道し、滿州・朝鮮を不

可分なものと捉えていたことを明らかにする。ついで、その白鳥と類似した認識を持ち、より具體的に論じた人物として稻葉君山を採り上げ、その日露戦争直後の論稿を分析し、そこに、高句麗史を根據に朝鮮半島と遼東半島を兩方同時に支配する「滿韓一統の經營」こそが日本の朝鮮支配に必要とする主張や、朝鮮人の滿州移住も本来一體なので當然とする主張が存在し、のちに「滿鮮不可分論」といわれる主張が既に事實上この時期から存在したことを明らかにする。さらに白鳥・稻葉の認識の共通性を確認し、彼らが本章で分析した論考執筆前である明治三九（一九〇六）年八月に京城（現ソウル）で會談していた事實を突き止め、彼らがその會談で共通認識に達したと推定する。

この章で最も重要なのは、稻葉の「滿鮮不可分論」が從來言われていた三一運動直後ではなくそれより一五年も早いことを明らかにした點である。井上氏は二〇〇四年にこれを既述しているが、本書の論證はその時より説得力を増している。稻葉の主張開始期の理解が變れば、その主張の意味するところも變わる。この論證こそが從來の研究と一線を劃す本書の新しさの源泉といえる。このほか、白鳥が日露戦争中に書いた時局に對する論考が轉載に當たつて一部伏せ字や削除となつた事實の發見や、白鳥全集未收錄の論稿を初めて分析し、彼の當時の「滿鮮觀」を明らかにした點など、新知見として高く評價すべきものは少なくなく、これらによつて從來の滿鮮史の批判的研究で殘された課題①が明確になったといえる。ただ本章は、滿鮮史の批判的研究で白鳥・稻葉が必ず分析されてきたという事實を知る研究者ならばわくわくして讀めるが、それを知らない一般讀者には、白鳥・稻葉への論の

展開に唐突感があり、論の筋道が理解しづらいように思われる。これは本書が「選書」であるが故の問題点でもあり、あとで詳述する。

ⅢもⅡに引き續いて追究課題①を検討する章だが、残された課題②も議論するためにⅡと時代が一部重複し、日露戦争期から韓国併合直前までの短い期間が扱われる。第一節では、Ⅱの最後に論じられた稲葉の「満鮮不可分論」登場の背景を日露戦争後の満州經營をめぐる議論と関係づけて考察する。そして満州軍參謀たちの積極的大陸政策路線・「滿韓一統」經營論との密接な關聯性を浮き彫りにし、稲葉の主張が日露戦争従軍時における満州軍參謀らとの意見交換などを踏まえ、強盛を誇った高句麗の史的展開過程を参照しながら討究されたと推定する。第二節では、初代滿鐵總裁後藤新平が白鳥の具申を受けて明治四一（一九〇八）年に行った、いわゆる「滿鐵歴史調査部」發足の経緯を、新史料「滿州歴史編纂の急務」に據って明らかにし、第三節では、そこで行われた朝鮮總督府平壤設置案の議論を通してその性格を検討する。そして、部員であった稲葉の滿鮮認識が他の部員にも共有されていたこと、歴史研究、なかでも高句麗史研究に基づいて具體的な政治課題が検討されたことなどを明らかにし、「歴史調査部」の滿鮮史が歴史地理考證中心だったのも軍事作戦に必要なからであり、そこでは眞に軍事的・政治的に必要な研究がなされ、そこは後藤の文裝的武備論や白鳥の「滿韓經營」に資すとの設置目的に眞に合致する研究組織であったと述べる。

本章の対象が短い期間になっているのは、滿鮮史という分野の確立に決定的な意味を持った「滿鐵歴史調査部」の發足事情とそ

の性格を明らかにするのがその目的だからである。結論は從來と大きく變わらないが、新史料や新視點からの考察によつてより具體的になっている點は高く評價されるべきであろう。ただ、第一節の推定は、稲葉が従軍した鴨綠江軍が満州軍とは別組織である點、満州軍參謀個々の意見として挙げられているものは「消極的經營」論なのに總體として出された見解が「積極的經營」論であることの整合性が突き詰められていない點などから、まだ十分な論證にはなっていないように思われる。また、第一節と第二節のつながりがわかりにくく、前章同様に一般讀者には話がどこへ向かうのかわからなくなつてしまひやすいように思われる。

Ⅳは、大正四（一九一五）年の「滿鐵歴史調査部」廢止以降の十數年間を扱うが、もっぱら稲葉の「滿鮮不可分の史的考察」〔以下、一九二二年論文と略す〕の背景を分析し、残された課題②を議論する章である。一九二二年論文は、從來稲葉が「滿鮮不可分論」を主張した最初の論文とされてきたものだが、井上氏は前節まででそれが日露戦争直後からであったことを明らかにした。したがつて、一九二二年論文執筆の背景・目的に對する從來の理解も再検討せねばならない。第一節では、旗田巍が、一九二二年論文は事實の一面だけを誇張して事實に反する強引なこじつけをしており、それは三一運動直後の朝鮮人の民族意識昂揚を抑えるのが執筆目的だったからで、朝鮮民族意識昂揚の據り所となる檀君神話を危険視して打ち破るために「滿鮮一體」「滿鮮不可分」を強調したのだと論じたことを挙げたうえで、それを論文の論旨に即して再檢證する。その結果、一九二二年論文は、朝鮮人移住を利用して満州への權益擴大を圖る日本の方針と「在外不逞鮮

人」對策としての朝鮮人保護の必要性を背景に、朝鮮人の滿州移住を正當化する論文という理解を提示し、稻葉の日露戰爭直後の「滿鮮不可分論」と一九二二年論文に通底する特質として日本の朝鮮支配を守るという目的があったことを挙げる。ついで第二節では、一九二二年論文を主な根據に「滿鮮不可分論」は檀君神話打破を目的とすると論じられてきた點を再検討し、彼が他の論文では檀君神話を「滿鮮一體」の歴史地理的空間の設定を可能にするものとして肯定的にも捉えていることを明らかにし、日本の朝鮮支配という觀點からは批判すべきだが、「滿鮮不可分論」という視點からは肯定的な存在とみていたという理解を提示する。

本章は従來の一九二二年論文の背景・目的の理解を大幅に改めたものであり、それはおおむね妥當と思われる。ただ、一九二二年論文が滿州移民保護を論じたことや稻葉の檀君神話に對する肯定的評價が従來完全に見過ごされてきたかのように讀める點は、既に旗田氏が兩者に、寺内威太郎氏も後者に觸れているので妥當ではない。ただ、旗田氏は滿州への朝鮮移民を論じることを「日本の植民地政策による朝鮮人の生活の破綻の表現であることに目をつぶり」（『日本人の朝鮮觀』一九二頁）、その移住を祖宗の故地に還ると曲辯したとみなし、それ以上の検討をしなかったため、その主張が日露戰爭期から存在していたことに氣附かなかった。また、旗田氏・寺内氏とも、朝鮮人が檀君神話を持ち出したことを中國に對する傳統的崇拜意識からの脱却として稻葉が喜んだと指摘するが、同時にそれが日本支配反對の方向に行くことに憂慮と反感を示したと述べた後はこのことに關心を拂わず、その後の「滿鮮一體」と關聯つけた諸發言を見過ごしてしまつた。だから

こそそれを再度粗上に上せて検討し、その後は「滿鮮一體」を促進するために檀君神話を肯定的に捉えて利用したと評價した井上氏の見解が新鮮なのである。この章には井上見解の新しさや研究史上の位置づけが讀者に傳わりにくいところがあるのだが、こうした旗田氏らの理解の相違をもつと前面に出して論じた方がこれらの點はわかりやすかつたように思われる。

Vは、滿州事變・滿州國建國から日本の敗戦までの十五年戰爭期を扱い、殘された課題(2)を議論し、追究課題②にも觸れる章である。滿州國建國は滿州史研究の發展をもたらしたが、當時の滿州史には、滿州は「古來支那の領土」であつたかと、滿州史には一貫した體系があつたかという二つの大きな課題があつた。この二課題をめぐる日中のさまざまな見解を丁寧で紹介し、滿州國を前提とした滿州史が必ずしも學問的論理で律せられていたわけではないことを示すとともに、當時にも高句麗史歸屬問題があつて「韓中歴史戰爭」と類似的議論がなされていた事實を明らかにする。ついで、稻葉以外の研究者の「滿鮮不可分論」が一九三六年の朝鮮總督南次郎による「鮮滿一如」の主張以降に現れ、それを學問的に追認するものであつたことを明らかにするとともに、稻葉がこの時期にも滿州移住と關聯づけてこの主張をしつつ、滿州國建國後の「日滿一體」の風潮を背景に倭を含む東夷一體論へと歴史體系を擴大したことを指摘する。さらに、同様の理解を示した者として三品彰英を紹介し、彼らの當時の「滿鮮不可分論」が日朝滿の結びつきを所與のものとして論じていたことを指摘し、そうした主張が學界では確乎たる地位を得られず、滿鮮史は滿州國史・朝鮮史の便宜的な集合にしかならず、それは滿州史が滿州國

を前提とし朝鮮史とは別の歴史枠組みとして設定されなければならないからであろうと論じる。

この章で重要なことは、満鮮史と満州史をきちんと分けて論じたことである。旗田氏以来の満鮮史が満州史・朝鮮史の集合體でしかなかったという理解を前提にすると、満州史の隆盛イコール満鮮史の隆盛になってしまうし、確かに當時の人びとはそう述べている。しかし、それは日露戦争期より満鮮史の構想を抱いて主張してきた稻葉らのそれとは明らかに違ったのである。旗田氏は當時の満鮮史認識の渦中にあつた人であり、戦後その反省の上に朝鮮史を確立しようとしたがゆえに、當時の便宜的な満鮮史のあり方を十分な検討を経ることなくそれ以前にまで遡らせてしまったのである。この新視角の提示は、旗田氏以来の満鮮史理解の「呪縛」を解いたものとして高く評價されるべきであろう。

VIは結論の章で、序論に當たるIと對應關係を持ち、井上氏がもつとも追究しなかった追究課題②を中心に議論がなされる。第一節では、ここまでの論述を、朝鮮・満州を一體として捉える認識は「日露戦争以後、日本の朝鮮半島支配のための歴史地理的空間・史論として登場し、満鐵の歴史調査部や稻葉君山を中心に研究・理論づけられ、一貫して日本の大陸政策と関わって言及されてきた」(二二頁)とまとめ、そのなかで高句麗史がどのように位置づけられていたかを整理する。その結果、近代日本の東洋史研究のなかでも高句麗史の位置づけには揺らぎがあり、満鮮史の場合は高句麗がその歴史地理的空間成立の唯一の根據として最重要視され、「多少の誤解を恐れずにいえば、満鮮史は高句麗史であつた」(二二八頁)のであり、そこに高句麗史研究者たる井

上氏が満鮮史研究に注目する理由があるという。第二節では、高句麗史をどのような視角から捉えるのが妥當かを検討し、一國史の枠組みに當てはまらない高句麗史の理解には「満鮮史的視座」が有効なこと、ここでのいう「満鮮史的視座」が戦前のそれと違うのは通時的な歴史地理的空間を設定しない點で、それを設定する「遼東史」とも異なること、「満鮮史的視座」では戦前との區別がつかないので便宜的に「東北アジア史的視座」と呼ぶこと、この視座は渤海や古代の諸族・中國郡縣の理解にも有効なこと、高句麗史・満鮮史の再検討は近代歴史學の再検討につながる、などが主張されている。

前章までの論述が本章によつて有機的につながり、結論たるにふさわしい章となっている。ただ、誤解を受けやすい問題を語るために主張が慎重すぎて回りくどくなっている感が否めない反面、「満鮮史は高句麗史」という斷言的フレーズを使つたことでフリーズだけが突出してしまつた感もあり、讀者に誤解を與えないか氣懸りである。また、本章を読むと改めて本書の問題關心の中心が高句麗をどう理解すべきにあることがわかるのだが、そうしたときに本書のタイトルに全く高句麗が登場しないことが改めて氣になった。本書タイトルについてはほかにも注意すべき點があるので、次節のなかで觸れることにしたい。

三

日本の歴史學界では、近代歴史學の產物である一國史觀を批判し、それを超えることを目指した研究が市民權を得るようになって久しい。これに對して、東アジア諸國ではそれぞれの國家

の課題と關聯し、依然として近代的な國民國家創成・國民統合に寄與する一國史觀的な歴史像が正統な歴史の位置を占める。しかし、高句麗や渤海のような現在の國家の枠を超えて存在した國家の歴史を扱う場合は、この歴史像ではどうしても十分には論じられない。そこで、評者を含めた日本の研究者は一國史觀を越えた歴史像を追究しようとするが、それは當該地域の近代史の史實と相俟つて戰前日本の侵略史觀を肯定しているような誤解を與えず、戰前史觀との違いを明瞭にすることが常に求められる。ただ、その場合に參考とすべき戰前史觀、とりわけ滿鮮史に對する批判的研究が、依然として一九六〇年代という時代背景を背負つた旗田氏の研究の延長線上にしかなかった點が、常に氣になるところであつたが、そうした認識は二〇〇〇年代に入つて當該問題を扱う研究者の間で廣がりつつあつたように思われる。そうした流れのなかから本書は誕生した。

こうした點を踏まえて本書を總括するならば、一九六〇年代の研究成果である、滿鮮史が日本による朝鮮・滿州支配という現實に奉仕するものであつたという認識を踏襲しつつ、安易で無自覺な滿州史・朝鮮史の集合體にすぎないとする理解を改め、それは出發時點において稻葉・白鳥らによつて高句麗を前提に體系性を持ったものとして構想されたものであること、そこで向き合おうとした現實が民族解放の動きへの否定とは違つた局面に存在したと、などを詳細に明らかにし、從來の研究水準を現代歴史學の問題意識に合わせて新たなレベルに引き上げたもの、と高く評價してよいであろう。從來、滿鮮史は單なる否定の對象でしかなかつたところがあるが、よく吟味するとそこには繼承すべき點があり、

それはそれとして「正當に」評價して繼承すべきであるという点とも、本書が示した重要な視點である⁽²⁾。序章ともいべきⅠで掲げられた四つの課題にも、それぞれに回答が示されていて一書としてのまとまりもよく、今後の滿鮮史への批判的研究において本書が新たな起點になることは間違ひなからう。

このように本書は、總體としては學問的に高く評價できるのだが、論述の仕方という點では問題點の指摘をしなければならぬところがある。そもそも前節で内容をかなり詳細に紹介し、その成果の新しいさについて詳しいコメントを附したのは、本書に読み取りにくさという問題があるからである。實は、本書を最初に一讀したとき、その論述がストンストンと腑に落ちたため、評者には當初、非常に理解しやすい著作のように思えた。ところが、授業で學生たちに、解説なしにまず讀ませて感想・疑問點を書かせてみると、彼ら／彼女らがその讀み取りに非常に苦勞し、その理解に混亂が發生しやすいことが明らかとなつた。評者自身も學生たちに解説をするため、本書の論理を丹念にまとめていく過程で、自分にとつて理解しやすいかつたのは、問題意識を共有し基本的事實を知っているからであることがわかつてきた。本書は専門家向けの研究書ではなく、一般讀者をも對象とする選書である。それだけに、これは大きな問題點といわなければならない。

読み取りにくさの原因はいくつかある。一般向けでもある點を踏まえるなら、複雑な事實關係を整理しやすくするための年表と、だいたいの關聯地名を入れた滿州・朝鮮地域の地圖は絶対的に必要であつた。また、各章、とりわけ前半のⅠ・Ⅲの論の進め方があまり構造的ではなく、一つの關聯性のつながりで論が次々と展

開しているように讀め、話がどこへ向いているのかの方向性を讀者が見失いやすくなっている。これについては、各章冒頭に、その章が何をどのように論じるものなのかを明示する前置きの一文をつけていれば解決できたように思われる。これらは編集技術的な問題であり、一般讀者にも配慮していれば氣が附いた問題に思えるだけに、とても残念な感じがする。

これら以上に讀みにくさの原因として問題なのは、キーワードの使用法が一定していない点である。もともと典型的なのが「滿鮮史研究」である。Ⅰの第三節のタイトルとして使われている「戦前日本の滿鮮史研究批判」でいう「滿鮮史研究」は戦前の研究を指すのだが、この節の最後の小見出し「滿鮮史研究の課題」（四五頁）の「滿鮮史研究」は、その項を讀む限り、どう見ても戦後／現在における「戦前の滿鮮史研究に對する批判的研究」のことを言っている。同じ頁の本文には「滿鮮史研究は新たな段階に入りつつある」という表現もあり、これなどはもともとわかりやすい。このキーワードの二重性は、何の説明もなく本書を通じて一貫して見られるため、讀者に非常な混亂を與えることになるのである。

これに加え、當時の資料で使われた用語を抜き出して使うことが多いためか、一つの意味を違う用語で表現することがしばしば見られる。例えば、Ⅲの第一節の小見出しには「滿韓經營」と「滿鮮經營」の兩表現が見られる。前者には史料からの抜き出しのため「」が附けられているので使い分けはわかるが、わざわざ見出しでまで史料用語を抜き出して表現する必要性は無いように思われる。また、Ⅲの第三節の小見出しには「平壤總督府設置

案」と「總督府平壤設置案」の二つの表現がある。これはどちらも同じことをいっており、この表現は統一されるべきである。本書の見出しを追うだけでも似た表現が多くて整理しにくく、誤解が発生しやすいだけに、表現の統一性についての配慮がもっとほしかった。

もう一つ、學生たちに讀ませて彼ら／彼女らの多くが疑問を呈したものに、章題の表現の問題がある。例えば、Ⅱは「近代日本の朝鮮・滿州認識と日露戦争」とあり、この章題から學生たちは當時の日本國もしくは日本國民の朝鮮・滿州認識が書かれているものと期待して讀みだすのだが、實際には白鳥・稻葉ら歴史研究者の朝鮮・滿州認識だけが採り上げられており、彼ら／彼女らはこれでは章題と内容が一致しないのではないかと感じるのである。確かに言われてみればその通りで、評者も當初あまり氣にしていなかったが、學生たちの指摘を受けて考えてみると「なるほど」なのである。この點は評者もやりかねないことであり、自戒の意味も込めてここに記したい。また、このことに關聯し、本書のサブタイトル「大陸政策と朝鮮・滿州認識」は本書内容と一致しないのではないかとする意見も學生から提出された。しかし、このサブタイトルは「帝國日本と〈滿鮮史〉」というメインタイトルとの對應で理解すべきで、この「朝鮮・滿州認識」は滿鮮史のそれを意味する。したがって、この學生の意見は妥當ではないのだが、そのように思われたのがⅡの章題ゆえであることは間違いない。

タイトルについてはもう一つ氣になることがある。前節の最後でも觸れたが、高句麗をどのような歴史枠組みで捉えるべきか、

という本書の眞の命題を窺わせる表現が全くないことである。いわゆる「腰卷」に「歴史は一國の枠組みで語れるだろうか」とのフレーズがあるから本書の課題がわかるのだが、もし「腰卷」が取れてしまえば、過去の当該問題を扱った著作との相違点をその装丁上から見つけることはできなくなる。内容の新鮮さをタイトルの古めかしさが覆い隠しているように感じるのは評者だけであろうか。

いささか問題點の指摘が長くなってしまったが、それは評者が本書を高く評價していることの裏返しに他ならない。一國史觀を乗り越える發想なしには、高句麗・渤海といった現在の國境をまたいで存在した過去の國家の歴史を「正當に」描くことはできない。そして、そうした發想のもとに歴史を敘述するには、どのようにそれを乗り越えるかを突き詰めていく作業がどうしても必要になる。井上氏によるこの作業の結果が本書なのだとなれば、次には、井上氏がこれまで書いてきた論稿を軸に高句麗史を本書の枠組み理解のもとに描き出す著書が出されるものと思う。プレッシャーをかけるようで恐縮ではあるが、次に出されることになるであろう井上氏の高句麗史の專著にも大いに期待したい。

最後に、特に氣になった誤字を挙げておく。一四八頁一三行目「パゴダ講演」は「パゴダ公園」。二一七頁一〇行目「學會におい

て確固たる地位」の「學會」は「學界」。二三四頁末行「朝鮮編纂委員會」は「朝鮮史編纂委員會」。

註

(1) 「滿州」「滿州史」「滿鮮史」「滿州國」などの用語の使用に當たっては、「自分は肯定してはいないが便宜上使用する」という留保條件付きの意味を込めて「」をつけることが多い。しかし、本書評のようにこれらの用語を多用する場合、いちいち「」を付けていくと煩雜になり、かつ引用や注意すべき用語を示す「」との混同も起こりやすく、都合が悪い。井上著書も同様の事情で省略していることもあり、評者がこれらの用語を留保條件付きで使用していることをここに明記したうえで、本書評でも「」を省くこととした。

(2) 戦前の滿鮮史研究の成果ときちんと向き合うことが新たな研究成果を生み出す可能性については、拙著「書評 赤羽目匡由著『渤海王國の政治と社會』」(『史學雜誌』第一二二編第八號、二〇一二年)でも觸れた。

二〇一三年一月 東京 塙書房
B六判 二六〇頁 二五〇〇圓十税